
学園都市と魔法と空と少年と

とみー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園都市と魔法と空と少年と

【Nコード】

N7371L

【作者名】

とみー

【あらすじ】

22世紀に入り、世界から取り残されていた日本はある力で再び世界の舞台へと舞い戻ること成功する。それは「魔法」と呼ばれる力であった。そうして「魔法大国」となった日本はその魔法という技術を守っていくために学園都市システムを構築する。これは、その学園都市に住む一人の少年の日常を描いたお話です。

ブローグ

日本が経済大国と呼ばれていたのは昔の話である。22世紀に入るころには急成長を続ける発展途上国に次々追い抜かれ、経済面において日本は世界的な地位も影響力も最早ほとんどなくなっていた。むしろ周りを海で囲まれた孤島の小国が今までよく世界をリードする程の地位を獲得していたものだと考える者も多い。

ではなぜ日本がその地位を手に入れられたか。理由はいくつか挙げられるがやはり一番はアメリカの後ろ盾があったことだろう。太平洋戦争で敗戦した日本が僅かな間で世界の舞台に戻ってこれたのはここに因るところが大きい。しかももちろんそれだけではない。日本は当時、世界に誇る武器を持っていた。

それは、「技術力」。

日本人の勤勉な人間性が生んだ力であった。そうして日本はオンラインワンの技術で世界での地位を確たるものにしていった。

だがそれも21世紀に入ると経済市場がBRICSを中心に移って行ったことによりアメリカとの関係は以前のような密な関係ではなく、冷え切ったものになっていった。日本お家芸であった「技術」の面においてもいつの間にかやら他の国にお株を奪われる形だった。

そんな日本だが現在世界の舞台へ再び返り咲いている。それも以前よりも遥かに強い影響力をもって。

世界から取り残され始めていた日本は改めて、お家芸である「技術」に力を入れた。しかし、ある程度の発明をしても世界に影響する程の力はなかった。世界に革新をもたらすような何かを日本は模索した。そこで白羽の矢がたったのが、世間的に超能力と呼ばれていた魔法などと呼ばれている分野であった。この力は非常に曖昧なものが多く、またその能力を持つ者も非常に少なく、研究対象としては比較的敬遠されやすい分野だった。だからこそ日本はそこに目をつけた。

万人がこの力を当たり前のようになれる、それは世界を塗り替える程の革命と成りえるんじゃないかと。えてして、日本はその試みに成功した。

ここは学園都市関東地区。現在の日本は以前の都道府県制度は廃止され、それぞれ非常に大規模な学園都市を中心とした8つの地区に分かれている。日本中どこで生まれたとしても例外なくいずれかの学園都市に所属することになる。今日から高等部に入る少年、二宮シンもその一人だ。

「急ぎなさい。真生ちゃんがもうまってるわよ。」

玄関に顔を出すと幼馴染の片岡真生が待っていた。

「悪い、すぐいく。」

「急いでね。入学式の前にクラスの確認しときたいから。」

真生が迎えにくるのはいつものことだ。ただいつもと違うのは身につけている制服、中学までのセーラー服からアイボリー色のブレザーとなっている。スカートも以前よりやや短くなっておりそこから絹のようになめらかな足が伸びている。

「……どこ見てるのよ。」

顔をあげると真生がこちらを睨んでいる。

「え、いや、その制服似合ってるなと思って。」

慌てて言い訳すると、真央はキョトンとした表情をした後、頬を少し赤く染めた。

「へへ、そうかな。」

咄嗟の言い訳がなんとなく真生の機嫌を良くするに至ったようだ。実際本当によく似合っているからさっきのセリフが出てきたようなものだ。というよりそらのモデル以上の美貌とスタイルを持

つ真生だったら大概の服なら似合いそうな気もするが…。

この学園都市関東地区には関東地区すべての教育機関が集まっている。その理由は能力者の囲い込みをするためだ。今やこの国に生まれてくる子供は一部の例外を除いて何らかの能力を有して生まれてくる。以前今の学園都市のシステムが出来上がる前までは、日本の技術を盗むために手段を選ばない外国の工作員による拉致が横行した。それを防ぐために生まれたのがこのシステムである。つまり、生まれてから大人になるまでの間子供たちを管理しようというわけだ。

シンも生まれた時からずっとこの学園都市内で生きてきた。今日からはこの月桂館高校で高等教育をうけることになる。

「クラス一緒だったな。知り合いいないから正直ほっとした。」

学校に来てみると玄関ホールの電子掲示板の前に人だかりができていた。この高校は学年ごとにネクタイの色が違う。3年生が青、2年生が緑、1年生が紅だ。紅が目立つことからおそらく1年生ばかりなのだろう。掲示板を見るとクラスの振り分けがされていて、シンと真生はともにA組であった。今は入学式のため体育館に来ている。

「本当に…。それにしても惜しかったよね。後もう少しだったのに。」

「惜しかったというのは入試の成績の話で、シンは10点差の次席だった。」

「いや、次席でよかったよ。もし主席になってたら新入生代表でありさつしなきゃいけなかったんだぜ。ほんと、緋暮とかいう奴には感謝しないとな。」

「まあよかったのかな…。シンが有名になったらなっただで…困るし…」

「真生、どうかしたか？」

我に返るとシンが不思議そうにこちらを覗きこんでいる。それも瞳の奥が見えそうなほどすごく近くで……。

「つつ！！！」

真生は突然顔を真っ赤にして慌てて後ろに跳び退った。

「近い！近すぎ。吃驚するからそういうのはやめて。じゃ、私もう行くから。またあとでね。」

そう言つて真生は小走りに1年女子が集まる中に消えていった。とりあえずシンの方も席に着こうとしたところで…

「なあ、さっき一緒に話してたコつて知り合い？」

隣を見るといかにも平凡そうな男が目を輝かしてこちらを見ている。いや、平凡というのは失礼か。僅かだが体から魔力があふれ出している。その濃密度からみておそらく相当な魔力を有しているのだろう。まあ、この学校に平凡な者などいないだろうが。

学園都市内の学校は全てSランクからDランクまでにランク分けされている。この学校はその中で一番上のSランクに位置する。Sランクの学校となるとこの関東地区の高等部に於いてはわずか7校しかなく、希望人数に対して募集人数は僅かであり、試験も難しいことも相まって必然的に優れた人材が集まることとなる。

「ああ、幼馴染だよ。」

「そっか、うらやましいなあお前。あんな可愛い子と幼馴染なんてよ。」

見ると遠いめをしながら鼻の下を伸ばしている。不審な表情をして見つめていると視線に気づいたのか慌てて姿勢を正した。

「えーと…すまん。自己紹介がまだだったな。俺は甲斐大和ってんだ。ちなみにクラスはA組。よろしくな。」

「俺は二宮シン。大和と同じくA組。よろしく頼む。」

その後入学式中の間ずっと大和のこの学校の目ぼしい女子についての談義を聞かされ続けた。

ホームルームが終わり、大和と話していると真生が他にも女子2人をひき連れやってきた。

「シン、もう帰る？」

「そうだな、今日はもう用はないし…帰るか？」

そう言つと真生が嬉しそうに頷いた。その笑顔がまた本当に絵になる。その笑顔を見た大和はだらつと鼻の下を伸ばしながら惚けた後、突然真剣な顔で何かを訴えるかのようにこちらを見てくる。

「……お前も一緒に帰るか？」

その瞬間大和は突然目を輝かせた。頭を縦にブンブンとふりながらシンの手を握ってくる。その反応を見た真生の後ろの女子の一人が気味悪そうに大和を見ている。

「君たちもどうか。帰る方向がもし一緒だつてんなら一緒に帰らない？」

すると二人はお互い顔を見合わせ、頷いてきた。

「それにしてもシン君すごいよね。学年次席つて。」

帰り道真生の友達の少女の一人がそう話しかけてきた。彼女の名前は山辺由紀、肌がほどよく小麦色に焼けており、髪も少し茶がかつておりショートヘアでいかにもアスリート然とした雰囲気漂わせている。顔を真生には及ばないものの十分な美貌をもっており、いかにも健康美人といった感じの爽やかな少女だ。

「本当ね。由紀ちゃんとはすごい違い。」

そう言つてもう一人の少女の名前は椎名姫花。黒髪がよく似合う凛とした感じのこれまたけっこうな美少女だ。日本舞踊を何代にも渡つて伝えてきた名家の娘なのだそう。確かにその凛とした佇まいを見ればそう言われても納得がいく。

「ヒメ！そういうことは言わなくていいの！！」

顔を少し赤く染めて姫花に怒っている。

「じゃあ、もしかして由紀は実技推薦でこの学校に？」

由紀が照れたように頷く。

「すごいな。よくあんな狭い門を。」

この学校の入試は実技による推薦と一般入試の2つがある。実技推薦は一般入試と違って魔法と魔法力のみを競う試験である。一般

入試であれば、筆記試験でいい成績が取ればとびぬけた魔法力や魔法がなくとも合格することは可能だが（それでも普通の者よりは優れた能力がなければならぬ）、実技推薦は本当に一部の優れた魔法や魔法力を持つていなければ合格は難しい。

「俺も実技組だぜ。」

シンと真生の驚きようを見て、これは使えらとでも思っただろう。得意満面の顔で口を挟んできた。

「へえ、そうなのか。すごいなお前。」

一切感情のこもっていない抑揚のない声で答えた。というより、魔力から見てそうじゃないかとは思っていた。そして、こいつの性格からみて絶対に自慢してくることも。

「ごめん、これからそのことあまり口にしないで。あんたみたいな奴が実技組だと知られたら、あんた以外の実技組の評価が損なわれてしまうから。」

由紀が顰め面でそう答える。

「お前今日が初対面なのに失礼だろ。一体何様のつもりだよ。」

「あらっ、実技組を代表して言っただけだけど。」

「そうか、わかった。お前とはどうやら馬が合わないらしい。」

「私はあんたを見たときからそう思っていたけれどね。」

どこか大和を小馬鹿にした感じで由紀が言う。その両者を交互に見ながら真生がおろおろしている。姫花は姫花で昔から由紀のこういう場面を見てきたのだろう。あきれたようにこの状況を見ている。「分かった。もうあんたには何を言っても無駄みたい。来なさい、叩き潰してあげる。」

「いいぜ、どっちが上かわかせてやるよ。」

お互いすごい剣幕でにらみ合っている。その二人から徐々に抑えきれない魔力がしみだしてきている。さすが実技組といったところか、お互いに魔力の濃さと洗練さは一般の者を軽く凌駕している。しかしいつまでも見てはいられない、二人の魔力が大量に漏れ始めたせいで、通行人がぼつぼつと気付き始めたせいだ。この魔力の規

模だと警察が出てきかねない。

「おい、二人ともやめろ。いい加減にしないと警察が出てくるぞ。」
シンの呼びかけ空しく、二人が気づく様子はない。

（仕方ない。入学早々から厄介事はごめんだしな）

相変わらず、二人は大量の魔力を撒き散らしている。その魔力がお互いの体を中心に集束し、その魔力が魔法へと変換されていく。

「やっぱりな。風を中心とした能力か。それにしても窮奇とは物騒カマイタチな能力を使うな。」

そう言いながら口元は笑みのそれへと変わっていく。

「あんたも見た目通りね。その技は確か肉体強化ストレングスだったつけ。魔力量に応じて肉体が強化される魔法よね。窮奇の相手としてはまずまずといったところかしら。」

由紀の表情にも獲物を前に嬉々とした獣のような獰猛な表情が広がっていく。

ジリジリと両者の間合いが詰まっていく。周りで見ている者にも目を離せない緊迫感と焼けるような高揚感を感じさせる。

ドッとお互いに地を蹴った瞬間、

「っっは？」

お互いの魔力がいつの間にもやら完全に消失していた。大和も由紀も何が起こったのか分からないといった感じでお互いに顔を見合わせている。

「シン、今何が起こった？」

呆けた顔で大和が問いかける。

「お互いの魔力量が一緒ぐらいだったから相殺したんだろ。」

「相殺だったのか？それよりもなんか掻き消されたような感じだったんだが。」

大和も由紀もお互いに納得のいかないうな顔をしている。

「それよりも今ので警察が来るかもしれない。早めにずらかるぞ。」
そう言つて5人は一時その場を去り、それぞれ帰路についた。約2名ほど最後まで納得のいかない表情をしていたが…。

プロローグ（後書き）

はじめまして。まだ書きはじめて間もない素人ではありますが、どうぞよろしく願います。

読んでいただきありがとうございます。

ダンスパーティー

「うるさい！静かに！」

担任の呼びかけ空しく、教室中は男子の騒ぎ声であふれかえっていた。先ほど続いているこの喧騒は全くもって終わりがみえない。こうなった原因は教卓の横で困ったように戸惑っている少女にあった。

この時間はクラス委員を決める時間となっていた。そして担任からの提案で男女各1名ずつを選出することになった。

「誰かクラス委員に立候補する人はいませんか。」

担任の声に一人の少女が手を挙げた。

「緋暮さんが立候補してくれました。他に女子で立候補する人はい……じゃあ、女子は緋暮さんで。それじゃあ次は男子で、立候補する人はいいますか？」

この声に男子のほぼ全てが手を挙げた。理由は簡単、教卓の横にいる少女と仲良くなるためだ。この少女こそシンを抑え入試の成績トップの緋暮那奈であった。優れているのは頭だけではなく魔法士としても超一流、そして容姿も完璧でまさに非の打ちどころがない。一緒にクラス委員となればその那奈と過ごす時間も増える、このチャンスに逃す手はない。

シンの隣の席に座る大和もそんな場面を想像してか、鼻の下を伸ばしながら立候補していた。

「すごい人気だな。」

そんな光景を見ながらシンは一人ため息をつく。クラス委員を決めるのにすでに30分もかかっている。いい加減疲れてきた。そんな様子に気づいたのか担任が一つ提案をしてきた。

「緋暮さんに決めてもらったら？それだったら皆も文句はないでしょう。」

この提案に男子たちは渋ったが、女子のイライラした雰囲気を感じ

じ取ったのか受け入れることにした。

「それじゃあ緋暮さん。男子の中から一人クラス委員を選んで。」

その言葉に男子の視線が一斉に那奈に集まる。その視線に少し怯んだ那奈だったが、意を決したように一人の名を呼んだ。

「じゃあ……二宮君、お願いします。」

……………

「は？俺？」

「はい、お願いします。二宮君が学年次席というのを聞きました。まだみなさんお互いのことがよくわかっていない時期ですし、少しでも信頼に足るものを持つている方がクラス委員になられた方がクラスとしても私としても良いと考えました。」

こうもスラスラと理由を言われては断れそうにない。こうしてシンはクラス委員を引き受けることになった。

放課後、クラス委員会があるということで真生には先に帰ってもらい、シンは一人学校に残ることにした。その際真生が不機嫌な顔をしていたが、理由を聞くのが怖かったので何も聞かないことにして早々に別れた。今は緋暮と共に生徒会室に向かっている。

「なぜクラス委員に？」

「早く学校になれるにはクラス委員が一番かなと思って。それにクラスの人々と接する機会も増えますし。」

ね、といった感じでこちらに笑顔を向けてくる。

（なるほど…これはみんな立候補するわ）

普段から真生を見慣れているシンでさえも見惚れそうになる。

「本当に俺でよかったの？」

「迷惑でしたか？」

「いやいや、そんなことないけど…。ただなんか俺のこと過大評価してるんじゃないかと思つて。」

「そんなことはありません。あの点数はまぐれなんかではとれません。それに二宮君を選んだのにはもう一つ理由があるからなんです。

「何？」

少し迷った表情をした後、那奈は意を決したように

「二宮君に興味があつたんです。中学の頃は勉強で私の相手になるような人は誰もいなくて、だから私と並ぶくらいの成績をとった人がいるって聞いてどんな人なんだろうって。一緒にクラス委員になつたらどんな人か分かるかなと思ったんです。」

（それにおもつたよりかつこよかったですし）

最後の言葉は心の中で。

ここまで言われて納得しないものもないだろう。それにこんな美少女と一緒にクラス委員をすることになったのだ。男として嬉しくないはずがない。

生徒会室のドアを開くと同時、

「遅いぞ。まさか二人でいちやついてたんじゃないだろうな。」

意地悪げな笑みを浮かべ問いかけてきた人物は、椎名緑。この学校の生徒会長である。

「いきなり何言ってるんですか。」

呆れたように緑に抗議しながら隣を見ると、那奈がほんのり頬を赤く染めてうつむいていた。

（ええ、何で赤くなってるんのこの人）

誤解されかねない那奈の態度を見てさすがのシン焦ってきた。そんなことしている間にその態度を誤解し始めた生徒たちが奇異な視線を向けてくる。

（やばい、このままじゃ変なうわさが広まっちゃう）

「ち、違います。ただHRが終わるのが遅かっただけで、いちやついていたわけではありません。」

しかし、慌てた返答が誤解の色を一層濃くする。そんな様子を樂しそつに見てた緑が

「いやあ、ごめんごめん。まさかこんなに慌てるとはおもってなか

ったから。みんなこの二人は本当に何も無いから。変な噂しないでくれよ。それじゃ、本題に入ろうか。」

そう言って真面目な表情に変わる。

「本校では毎年生徒会主催のダンスパーティーというのを開いている。生徒会の主催であるから当然学校の職員はこの件に関与は一切しない。なので生徒会が呼びかけなど行っていかなければならないんだがなにぶん人手が足りなくてね。そこでクラス委員にはクラスで呼びかけを行い人をあつめてもらいたい。以上、何か質問のある奴はいる？」

「それだけですか？」

「ああ、それだけだ。質問のあるやつもないようだし、これでこの話し合いは終わる。」

何か拍子抜けだ。俺はこんなことのために真生を不機嫌にしてしまったのかと思うと鬱な気分になる。

「二宮君はダンスパーティーに参加されるんですか？」

ふと那奈が尋ねてきた。

「うーん、本当は参加したくないんだけど…クラス委員だからな、参加せざるを得ないかな。あ、それと俺のことはシンでいいよ。二宮ってあんまり呼ばれてないし。」

「じゃあ、私のことは那奈と呼んでください。そうですね。クラス委員として率先して参加しないといけませんよね。」

そう言いながら、両手をコブシにして張り切っている様子が何とも可愛らしい。

「それにしても下の名前で呼び合うなんて、なんだか友達みたいですね。」

「は？」

（いきなり何を言うんだ。この娘は…）

「あれ、何か可笑しいこと言いましたか？」

そう言って不思議そうに首を傾げている。

「いや、みたいっていうか…もう友達でしょ？」

その言葉に驚いたように彼女は顔を輝かせた。

「そつかあ。いつの間にか友達になっていたんですね。わたし小中学校時代は女子校に通っていたので男の友達初めてなんです。じゃあ、これからよろしく願いますね、シン君。」

言いたいことはあったが、そう無邪気に笑われてはこれ以上何も言えない。

「ああ、よろしく。そういえば時間遅いけど大丈夫？送って行くのか？」

「いえ、それには及びません。校門のところに迎えが来てますのでそれじゃあ、また明日。」

そう言って走り去って行ってしまった。

一見淒くしつかりしていそうな（というかしつかりしているのだろうが…）少女、緋暮那奈。

見た目とは裏腹になんだか少しズレた人物であった。

それから1週間が過ぎ、ダンスパーティー当日。シン、真生、大和、由紀、ヒメの5人がやってきたときにはすでに多くの参加者が会場に集まっていた。

「それにしても高校の行事でこれほどの場所をどうやって…」

シンが驚くのも無理はなかった。この会場があるのは国内でも屈指の5つ星ホテルの最上階に位置する大広間。部屋一面中にところどころ金の刺繍が施された豪華な赤い絨毯が敷き詰められている。

天井には眩く輝くシャンデリアが備え付けられており、フロア端ではところ狭しと豪華な料理が並んでいる。

「へへ、すごいでしょう。」

声をかけられた方を振り向けば、背の低い小動物のように可愛らしい少女がたっていた。

「あなたは…確か副会長の…」

「そ、生徒会副会長の竜胆かすみ。はじめまして、二宮シン君。後

るの君たちもよろしくね。」

「よろしく願います。」

全員が揃って言うと、嬉しそうに一つ頷く。

そこでさっきの会話で一つ気になったことを聞いた。

「なんで俺の名前を？」

「そんなの知ってて当然でしょう、私は生徒会の副会長なんだし。」

君は入試で次席をとってるし、生徒会室の話し合いのときも見てるしね。……まあ本当はそれだけじゃないんだけど。」

最後の方はよく聞き取れなかったが、理由は分かった。

それであとは最初に気になった疑問、

「この会場は生徒会で準備したんですか？」

「そうだよ。すごいでしょ。」

「凄すぎですよ。誰か生徒会に資産家の子供でもいるんですか？」

「いいや、そんな人は生徒会にはいないよ。純粹に生徒会の力で準備したの。」

「あれもですか？」

真生が料理を指さして言う。

「そう。このホテルのシェフに言って作ってもらった。」

全員が啞然とした。この学校の生徒会は明らかに生徒会の範疇を超えた異常ともいえる力を持っている。かすみはその反応を満足そうに見ている。

「ま、そのうち慣れるよ。うちの生徒会は教師よりも学校内外での影響力が強いからね。もしいろいろ知りたいんだったら生徒会に立候補したらいいかも。あ、緑の話が始まるよ。」

突然会場全体の明りが消えたかと思うと広間の中心にスポットライトがあてられ、そこに1人の美少年が立っていた。全身を白のタキシードで身を包み、胸には赤いバラが刺さっている。白のタキシードが肩口まで伸びている美しい黒髪とその端正な顔立ちを普段以上に映えさせてみせている。

「皆さん、こんばんは。生徒会長の椎名緑です。今日はこのパーテ

イーにきてくれてありがとう。せっかくだし、これを機会に男女の交流を深めていってほしい。また、今日は1年生から3年生まで集まっている。1年生は上級生から話を聞いて今後の学校生活に活かしていってくれ。最後にだが見れば分かる通りささやかながら食事の準備もさせてもらった。これは一流のシェフに作ってもらったものだ。そちらの方もよければ堪能していってほしい。以上、今日は存分に楽しんでいってくれ。」

緑の話が終わると同時、銀のきらびやかな光がフロア全体を包み込み、ステージで控えた楽団による演奏が始まった。

「すごい。綺麗…」

フロア中の生徒がこの銀の光に目を奪われている。

「副会長、これは…まほう…ですか？」

「そうだよ。」

シンの問いに当たり前のようにかすみが頷く。

（これって、確かこの前のオリンピックの開会式で使われた魔法じやなかったか。そんな魔法技師までもよんでるなんて、この高校の生徒会は非常識すぎだろ）

「ねえシン、私たちも踊らない？」

真生に声をかけられて周りを見ると、いくらかの生徒が既に踊りはじめていた。

「喜んで。」

紳士よろしく床に片膝をついて一礼し、真生の手をとる。次いで流れるような音楽に合わせて踊り始めた。

「何かみんながこっちを見てる気がするんだが。」

踊り始めてすぐに周りからの視線を感じるようになった。

「そう…かな。」

「まあ、仕方ないか。今日の真生は一段と綺麗だからな。みんな見惚れてんだろ。」

（周りから見たら月とすっぱんのような組み合わせみたいに見えてるんだろ…）

しかし、そんなシンの考えは見惚れているということを除けば全くの見当違いであった。彼は椎名緑と比べれば確かに見劣りはするが十分にイケメンな部類に入る人種である。視線を多く感じたのはシンと真生の二人の踊るさまが驚くほど絵になっており見惚れていたからであつた。

「き、きれい？」

「ああ、綺麗だ。」

すると真生は顔を一気に真っ赤に染め上げると同時、動揺したせいで足を挫いてしまった。

「おい、どうした。大丈夫か？」

「うん。なんとか。これぐらいだったら治癒の魔法ですぐ治るよ。」

真生が足首に手をかざすと淡い黄緑の光が足を包んだ。数秒して光が消えたときには腫れは完全に引いていた。

「とりあえず、端の方に座っておこうか。今から飯とってくるから少し待つといてくれ。」

そう言つて飯を取りに行つたシンだったが…

「何だ。あれは？」

目の前に人だかりができていた。それも男子ばかり。その中心にいたのは、

「那奈！？」

さすがというか何というか人だかりの原因は緋暮那奈へのダンスの申し込みであつた。ここまで男を惹きつける那奈の美貌にやや呆れながら、足早にこの場を去ろうとするシンに突然後ろから声がかつた。

「シン君！！」

振り返ると那奈がこちらに駆け寄ってくる。その後ろで那奈を取り囲んでいた男どもの視線が一斉にこちらに集まっていた。

「皆さんすみません。実はこの方と既に約束していたんです。本当にすみません。」

「えっ」

那奈が健気に謝る姿に諦めたのかみんなこの場から去っていく。
シンを一睨みすることを忘れずに。

（せっかく関わらないようにしたのに…）

心の中で嘆く。そうなのだ、足早にあの場を去ろうとしたのは何か悪い予感がしたからであつた。しかしその行動空しく、結果は悪い方に転がった。

「突然ごめんなさい。どうしようもなくて困つてたらシン君の姿が見えたので…つい……」

申し訳なさそうに俯いている。

「仕方ねえよ、もう終わつちまつたことだし。気にするなどは言わないけどな。でも悪いけど俺用があるから一緒に踊れねえぞ。」

「あ、それは大丈夫です。隅っこで友達とおしゃべりでもしてますから。踊れないのは少し残念ですけど…」

最後の方はほとんどごもご言っていてよく聞き取れなかった。

「それならよかった。それじゃあ俺は急いでるから。」

急いで食事を取りに行った。

「あいつ何が好きだつたわけ？」

そんな独り言を言いながら適当に料理皿に取っていく。

そして帰ろうとしたところで怒鳴り声がフロア中に響き渡った。

「何だ。喧嘩か？」

声のした方に慌てて向かう。

近くに行くと、声のしたところを取り囲むように人だかりができていた。

「すみません。」

謝りながら人だかりをかき分け進んでいくと円の中心に黒いフィツトスーツに身を包んだ3人の男たちが立っていた。次いで、黒服の男たちが抱えている少女に目が移る。

「真生!!!」

抱えらている少女は深紅のドレスに身を包んだ真生であつた。

シンの中に沸々と怒りが沸き起こってくる。そうして怒りが限界に達しそうになった瞬間、何者かに腕を掴まれた。

「落ち着いて。君がでるまでもないわ。ここは緑に任せれば大丈夫。」

シンはまだ何か言おうとしたが、さっきまでとは打って変わって落ち着き払った雰囲気にも言えなくなった。

視線を前に向けると、いつの間にやら緑が黒服たちの目の前に立っていた。

「随分と派手な登場だね。大の男三人がいたいけな少女を捕まえて一体どうするつもりですか。」

「お前には関係のない話だ。」

「関係ありますよ。その少女はうちの学校の生徒ですから。」

先ほどからずっと笑顔を絶やさず、悠長に犯人と話をしている様にシンは苛立ちを募らせる。

「何を悠長に。」

「だから落ち着きなさい。もうすぐ解決するから。」

緑と言えば相変わらず悠長に会話を続けている。しかしやがて犯人の一人が痺れを切らしたように

「早くそこをどけ、さもないとこの女を殺す。」

そう言って、真生の喉元にミリタリーナイフを突き立てる。

「それは困りますね……」

全然困った様子など見せずに答えた次の瞬間、明らかに緑の纏っている空気が変わった。

そして真生を抱えている黒服を指さし……告げる。

「そこのお前、その子を下におろせ。」

すると、真生を抱えていた黒服はゆっくりと彼女を自分たちから少し離れた地面へとおろし、元の位置に戻った。

黒服たちは仲間の不可解な行動に揃って困惑した表情をしている。そして再び今度は3人を指さし……告げる。

「全員、そこにひれ伏せ。」

すると、黒服の全員が地面にひれ伏した。そこに控えていた他の生徒会役員が飛び出し黒服たちを拘束する。シンとかすみは真生の方に駆け寄る。由紀と姫花、そして大和がこちらに駆け付けてくるのが見える。

「薬をかがせられて眠らされただけみたいね。大丈夫よ。」

そう言われてひとまず安堵した。それで一番気になることを聞く。
「さきほどの会長の能力はまさか^{パーソナルコントロール}人身掌握？」

「ええ、そうよ」

その問いに緑の妹である姫花が答えた。

「兄さんの人身掌握は意識した対象の体中の魔力を乗っ取って体のコントロールを奪います。先ほどのような場面にはうってつけの力です。ただ、力が格上だったり、拮抗していたりする人にはあまり効果がありません。また、人数が多ければ多いほどコントロールが雑になります。まあ、3人ほどでしたら余裕だとは思いますが。」
「まさか難度Aの魔法を操るとは、会長の名は伊達じゃなかったんだな。」

人身掌握が難度Aといわれているように全ての魔法にはSからFまでランク分けがされている。例えば由紀の使った窮奇が難度B、大和が使った肉体強化が難度Dといった感じだ。

難度Aの魔法となれば日本全国で見ても使える者は限られる。

「それにしても生徒会皆で作った防護壁をどうやって破ったのでしょうか。犯人を見る限り、防護壁を破れるような力を持っていなかった。となるとやはり、うちの生徒に内通者がいるということになるんでしょうか……」

「副会長、ぶつぶつ呟いてどうかしました？」

「いえ、何でもありません。それよりも先ほどのようなこともありましたし、パーティーはこれで終わりです。皆さんも他の生徒と同じように家に帰ってください。」

周りを見ると人がだいたい減っていた。

「すみません。それじゃあ先に失礼します。」

「はい、気をつけて帰ってくださいね。」

5人は揃ってホテルを後にした。

「さて、私はもう一仕事しますかね。」

そう小さく呟いてかすみはフロアを後にした。

「全く、使えない人たちだわ。」

そう言いながら生徒会役員の一人、斎藤エリカは屋上でヘリを待っていた。

「せっかく私が手引きしてやったというのに…これで報酬もパーですわ。」

そんな一人憤慨しているエリカの背に声がかかった。

「あらエリカ、こんなところで何してんの？」

「え、あ、かすみさん。驚かさないで下さらない。今はヘリを待っていますの。さきほどのこともありまし、ヘリで帰った方が安全だと思ひまして。」

なんとかボロは出さないで済んだ。

「じゃあさ、私も一緒にヘリに乗っていい？」

「は？」

その言葉はエリカの予想を遙かに裏切るものだった。

「だって、危ないって言うんなら私も同じでしょう。だったら一緒にエリカんちに言ってから家に帰った方がいいと思って。私の家とエリカの家は近いしね。」

笑顔でこう言われては断れそうにない。それにいい良い訳も思い浮かばなかった。

（まあいいわ。ヘリが来たら人数をかけて一気に片付けてしまいましょう）

「かすみさん、ちょっと待ってて下さいね。連絡しますから。」

エリカはそう言うと言無線機を使って、何事か話した。

「…ええ、邪魔が入りました。つき次第人数をかけて潰します。準

備をしておきなさい。」

エリカが無線を終えて振り返ると、心配そうにこちらを窺うかすみの顔があった。

「大丈夫だった。」

「ええ、問題ありませんわ。」

「良かったあ。あ、へり来たみたいだよ。」

無邪気に空を指さしながら言う。

（それがあなたを害すものだとならずにね）

へりがホテルの屋上に着いてすぐ、先ほど騒ぎを起こした者たちと同じ黒服が次々と屋上に降りてきた。

「ふふ、アハハハハハ。本当にあなた馬鹿ね。私が犯人だとも知らずにノコノコついてきちゃって。でも大丈夫、命までは取らないわ。ちよつと頭と身体をいじらせてもううだけ。」

（どういふ表情をしているかしら）

そう思いかすみの表情を見てエリカは眉を顰めた。

（笑ってる？）

見ると確かに口角はつり上がり表情は笑みを形作っていた。

「はは、マジ笑えるわ。まさか自分から犯人だって名乗り出るなんてね。ま、言わなくても分かってたんだけどね。…ん？どうしたの。早くかかってきなよ。面倒くさいから全員で来てね。」

そう言って、笑顔で手招きしている。

「別にわかっていたとしても、どうせ結果は変わらないのですから一緒ですわ。」

言うと同時に、エリカがかすみを指さしたのを合図に黒服がかすみに殺到する。

魔法で強化されているのだろう、常人離れしたスピードで迫る。

そして、後コンマ数秒で黒服たちの拳が届く瞬間、黒服全員の耳に短く声が響いた。

「失せろ。」

その瞬間、黒服たちの五感全てが完全に途絶えた。

わけが分からない。それがエリカの反応であつた。

黒服たちがかすみを取り抑えたと思つた瞬間、光とともに爆音が響き渡つた。その後煙がもうもうとして状況が完全に分からなくなつた。

（今は…一体）

すると煙の中から不思議と通る声が聞こえてくる。エリカは思わず身構えた。

「ねえ、私の二つ名って聞いたことある？」

煙が晴れていき、中から少女の姿が現れる。黒服たちはと周りを見ても誰もいないどころか塵一つない。

「…無痕^{むこん}の士。」

「そう、さすが。この二つ名はね、私の戦いの痕を見た人たちが勝手につけたもので正直不本意なの。あたしの能力は、爆炎^{イクスプロジア}っていうんだけど、やっぱりそれにちなんでかつこいい名前を付けて欲しかったなあつて。」

聞いたことがある。彼女の戦いの痕を見た者が必ず口にする言葉。

「…彼女の後（痕）には塵一つ残らない。」

思わず口からこぼれ出ていた。

「さすが生徒会役員、何でも把握してるのね。」

自分のことのように嬉しそうにかすみが頷く。しかし、その直後表情が哀しみの色に染まる。

「だけど、もうひとつの生徒会役員の姿を忘れたら駄目でしょう。」

生徒会役員は全ての生徒の模範にならないといけないの。その生徒会役員が率先して悪さしたら生徒たちの信頼を裏切る行為になってしまう。だから二度とこんなことしないよう同じ生徒会役員がちゃんとお仕置きしなきゃ。」

そう言いいいながら彼女がこちらへと歩みを進めてくる。エリカは思わず尻もちをついていた。恐怖のあまり足が竦んでしまっていた。そうしている間にもかすみはこちらへと近づいてくる。

「こ、来ないで。」

怯えて焦るあまり、魔法を使うことも忘れていた。かすみは既に目の前にいる。表情は先ほどとは違い一切の感情の欠片もなく、ただただ無表情であった。

そして手をエリカの頭に翳して一つ呟く。

「私は緑ほど優しくないわ。」

その言葉を聞いたのを最期、斎藤エリカの存在は完全にこの場から消え失せた。

ダンスパーティー（後書き）

切りどころが分からなくて、長くなってしまいました。
今回も読んでいただき、ありがとうございます。

入部！

あの事件から早2週間がたった。

あれだけ絶えなかった事件についての話題も2週間もたつとほとんどなりをひそめ、今は明日から始まる部活の入部についての話題で持ちきりだった。

机をひつつけてご飯を食べながらシンたちもどの部活に入るかといった話に花を咲かせていた。

「どうすっかなあ、中学からやってた野球にするか、それとも陸上にするか、はたまたバスケットか…、ああきまんねえ。」

そう言って頭を抱えるのはシンだ。

「そんなの決まってるだろう。陸上だ。お前は俺と陸上をするべきだ。」

そう言うのは大和、部活見学に何度も足を運んでおりもう練習に混ざっている。

「確かに。大和と一緒にするのは癪だけど、シン君も陸上に来るべきだと思う。50メートル5秒台だったし、100メートルで全国行くのも夢じゃないよ。」

「そっかあ。由紀も陸上だったね。私はどうしようかな。」
由紀もシンと同じように頭を悩ます。

「ねえ、ヒメはどうするの？」

「私は弓道部。袴を着てみたいし、何よりもあの緊張感のある静けさが心地よかったから。」

「弓道部か。ヒメのことだから演劇部だと思ってた。」

「まあ、それでも良かったんだけど、家でもそんな感じのことはやってるし、それなら学校ぐらい何か他のことをやってみたいと思ってるね。」

「椎名の袴姿かあ……へへ。」

（（（こいつは何を考えてるんだろう）））

鼻の下を伸ばしながらいやらしい笑みを浮かべる大和にシンたちは若干引きながら同じことを考えていた。

「真生、お前はどの部活に入るつもりなんだ。」

帰り道、ふと先ほどの会話を思い出してシンは聞いた。

「うーん、私も実はきまってるないんだ。」

「そっかあ、真生は何でも器用にこなすからな。どの部活に行ってもうまくいくと思う。」

「そっかな。」

シンの言葉に照れたように頬を染める。

「なあ真生はさ、俺にどの部活やってほしい？」

「えっ」

真生はその言葉に驚いたように声をあげると、今度は首を傾げながら考え始めた。

「むずかしいな。シンのことだからきつとどの部活でもうまくいくんだと思う。まあでも私的には、シンには中学校みたいに野球をやってほしいかな。野球名門校から声もかかってたし、野球やってるシンはともかっこよかったから。」

「そっか。じゃあ野球部にすっかな。」

「ええ、そんなあっさり決めていいの。」

「いいんだよ。昔からずっと一緒に俺のことをよく知ってる真生がそう言うんだから間違いない。俺はお前を信頼してるからな。」

そんなことを恥ずかしげもなく言っただけ。

真生はというと対照的に顔を紅く染め上げて俯いている。

「……私もだよ。」

「そっか、嬉しいな。」

シンはそう言って無造作に、真生の頭を優しく撫でる。

「……私の気持ちも知らないで簡単にこんなことして……」

「ん？何か言っただか？」

「何でもない！！バカ！」

そう言って真生は早歩きでシンの前を歩いていく。

「はあ、俺なんかしたっけか？」
自覚なく頭をかきながら呟くシンであった。

次の日、シンは野球部のグラウンドに足を運んでいた。

「じゃあ、一番左の奴から自己紹介をしていってくれ。」

3年生らしき人が言うと、左の新人部員から自己紹介が始まった。

「うわー、こういうのなんだか緊張するね。」

「……………なぜお前がここにいる。」

いつの間にか隣には真生が立っていた。

「なんでって、そんなの決まってんじゃん。野球部のマネージャーになるためだよ。」

「はあ、よりもよってなんでマネージャーなんか選んだんだよ。」

「別にいいじゃない。絶対楽しいよ。というか私がマネージャーになるのがそんなに嫌なわけ。」

「そういうわけじゃないけどさ。」

二人で小声で言い合っていると、隣の奴が肘で小突きながら、小さく声をかけた。

「おいっ、次お前だぞ。」

その声に顔をあげると全員の視線がこちらに集まっていた。

「す、すいません。月野中から来ました。二宮シンです。中学校の頃はキャッチャーをやっていました。よろしく願います。」

名前を言った瞬間視線がきつくなっただような気がした。それになんだかざわついているような気がする。

「あいつがあの中中の？」

「まさかこの学校に来てるとはな…」

「即戦力だな。」

「キャッチャー志望だったけどもう俺降りるわ。」

「なあ真生、ヤバいみんな怒ってるよ。」

そんな噂をされてるとも知らず、張本人はやや怯えている。

「シン…あんたってホント鈍いわよね。」

「何のこと？」

キョトンとして聞き返す。

「はあ、もういい。」

「なんだかちよつと今の発言には頭にきたぞ。俺はどっかの漫画の主人公みたく鈍くないぞ。俺はちゃんとラブ臭をかぎわかる自信がある。」

頭を痛そうに押さえながら言う真生にムツとしたようにシンが言い返す。

「はあ…」

最早言葉を発するのもだるそうに溜息をつく真生であった。

「それじゃあ、今日の練習はここまで。一年はグラウンドの整備をしる。下校時間が近いから急げよ。」

野球部の練習が終わった。今日は新入部員との交流が目的だったためキャッチボール程度の軽めの練習で終わった。それにしても高校生ともなると野球のレベルは一気にあがるもんだな、とシンは思っていた。何気ない先ほどのキャッチボールだけでもそれがよくわかる。シンの相手の先輩はほとんど距離が離れていてもシンの胸の位置からボールが逸れることがほとんどなかった。それに一球一球ボールが重い。夏も近いというのに冬にキャッチボールしているように手がジンジンと痛んだ。

（こんなレベルの高いところで野球ができるとは……魔法が目的で来たところだったけど、これは嬉しい誤算だったな。）

自然と笑みがこぼれてくる。

ただシンは気付いていない。そのキャッチボール相手が偶然にもプロ注目の投手であり、もちろん他の選手はそれほどの技量をもっていないことに（とはいってもある程度のレベルはレギュラー全員が持っているが）。

「二宮！ちよつと待ってくれ。」

整備も終わり、真生と一緒に帰ろうとしているところに声がかかる。後ろを振り向いてみると先ほどキャッチボールをした先輩である榎下光一とキャプテンの高橋誠治が立っていた。

「一緒に帰らないか？」

誠治が声をかけてくる。シンはその言葉を聞いて真生に視線を動

かし、真生と目で会話をすると頷く。

「じゃあ行こうぜ。お前らもこっち方向だろ？」

そう言つとシンたちと肩を並べて歩きはじめた。

「早速だが聞きたいことがあるんだが…」

「なんです。」

シンはその質問に少しだけ身構えながら返す。自己紹介のときに私語をしていたのを怒られると思ったためだ。

「二宮、お前はなんでこの学校に来たんだ？お前ほどの選手なら名門校から誘いがたくさんあったんじゃないのか？」

怒られなかったため若干安堵する。

「それは高校には魔法を学ぶために来たからです。なんで野球推薦の話は全部断りました。」

「シンは魔法の才能もあるからねえ。」

真生が自分のことのように自慢げに話す。

「本当は勉強に集中すると野球の方が中途半端になっちゃいそうなので入るつもりはなかったんです。でも必ずどこかの部活に所属しないといけないっていうのを聞いたんで、それなら野球をと。真生の後押しもありましたし。」

真生が嬉しそうに頷く。

「ああ、もちろんやるからには野球を中途半端にするつもりは毛頭ありません。やるからには本気でやって魔法と野球の両立をしてみせます。」

力強く言うシンに対して先輩2人組は

「「当然だろ。」」

と笑みを浮かべる。

「高校と中学じゃ練習量が全然違う。ついてこれるか？」
挑発するように光一が問う。

「それでも体力には自信があります。それに先輩たちも通ってきた道でしょう。」

「そう言われればそうだな。」
シンの指摘に光一は苦笑する。

「二宮は知らないかもしれないが、今年は月桂冠野球部史上最強と呼ばれるほどチームのレベルが高い——」

誠治はそこで一旦言葉を切り

「今年こそ頂上^{デッペン}をとる。」

と不敵に笑った。それにつられて光一とシンの顔にも笑みが広がっていく。

そうして無言で不敵に笑いあう3人と1人流れについていけない真生であった。

入部！（後書き）

久しぶりに更新しました。相変わらずの駄文ですみません。これから時間があったらどんどん更新していきたいと思います。お読みいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7371/>

学園都市と魔法と空と少年と

2010年10月8日13時50分発行